

メンネルコールありの実 コロナ奮闘記 感染対策徹底しても陽性者発生

団長 中田武志

6月12日、埼玉県久喜市栗橋文化会館イリスホールにおいて開催された「イリス合唱祭」は、私達にとって今後長い間忘れることができないであろう感動的な演奏会となりました。



私にとって、「遠くへ行きたい」の冒頭の8小節では、胸の奥から熱いものがこみ上げてきて「喉を開けなくちゃ」と自らを叱咤しながらもまともに歌えなかったピアノpでした。

思い起こせば、遙か四半世紀前の昔、震災復興の槌音が響く神戸の街でマーラーの「復活」を歌った時の、あの地の底から湧き上がるようなイントロ部分の長いピアノシモで味わった感覚に近かったのかもしれない。

「イリス合唱祭」は、私たちにとってほぼ2年半ぶりのオンステージであったと同時に、コロナとの真剣勝負で、あと僅かというところで健闘むなしく一敗地にまみれ、あわや皆の気持ちバラバラになりかけたところで、逆に、新たな結束をもたらしてくれたエポックメイキングなイベントだったと位置づけられるのです。

団内に陽性者発生、2か月練習休止

今年の1月末、とある練習日の翌日でした。合唱団の仲間4名がコロナに感染したとの報に接して「何故だ!」と驚愕し思わず絶句しました。

当時、まん延防止条例は解除されていたとはいえオミクロン株は引き続き高いレベルで流行中にて、感染者発生はあってもおかしくはない時期ではありました。然しながら、私たちは、これまでの2年間、マスク着用・検温・消毒・換気・ソーシャルディスタンス他のどの合唱団にも引けを取らぬと自負する感染防止対策を実施、特に、広くて換気の良い練習場所に恵まれたこともあって前後2m、左右1.5mの間隔をとり、換気にいたっては、真冬でも15分間隔で窓を全開にして空気の入替えを行いこれまで休むことなく練習してきたのです。

その対応は、全日本合唱連盟の「合唱活動における埼玉県合唱連盟拡大防止のガイドライン第3.1版」に完璧に準拠しており、感染者同士の特別な接触もなかったのに、なぜ?と言葉を発せざるを得ませんでした。今でも疑問は残ったままです。

とまれ事実は事実、私たちは急遽2、3月の2か月間の活動休止を決定し、活動再開の時期、再開にあたっての条件などを事前に全員で協議することとしました。

練習の都度、全員抗体・抗原検査で確認

幸いなことに、感染者全員が軽いインフルエンザ程度の症状



で10日間の自宅隔離を経て元気に回復したこともあり、4月初めに総会を兼ねて全体会議を行いました。会議は再開時期を巡って紛糾、喧々諤々の議論ののち、4月中旬から再開する4月組と5月以降コロナの状況を見て参加する5月組に分かれて兎も角も翌週より再開することを決めました。

6月の「イリス合唱祭」への出演意欲において双方変わりはなくとも、実体験したコロナへの恐怖は無理からぬことと皆が分かっていたからです。更にまた、練習再開にあたっては、5月末まで練習日の都度、指揮者、伴奏者を含む全員が抗体・抗原検査を実施し、陽性者が参加していないことを確認することも即刻実施することを決定しました。

一部私費負担をお願いしたこともあって、ネットショッピングに手慣れた団員に安い日に検査キットを大量に購入するようお願いし頒布してもらいました。私は、「素人の、しかもローカルでチツボケな合唱団がそこまでやるか」と内心思っていたのですが、実に不遜であったことを今でも反省しております。

5月の声を聞いてまもなく5月組が全員参加し、団員の心が急速に一つにまとまってきたことを心から嬉しく思う日々が訪れました。

無事歌い切った2年半ぶりのステージ

6月、漸く「イリス合唱祭」が開催されました。

マスク着用やオンステージ人数制限をものともしない他合唱団の素晴らしい演奏、簡素ながら出演者と観客の安心安全に万全の配慮を払った運営と相まって最高の演奏会であったと思います。

はるばる私たちの応援に駆けつけてくれた白岡市女声合唱団の数名からは「とても素敵でした、特に、<帰れソレントへ>のさびに大変迫力がありました」とコメントをいただき団員一同喜びました。

コロナ禍の長かった2年半の戦いを振り返ると、ステージで感動した理由が良く分かります。今度は、10月の秩父宮記念市民会館大ホールにおける「彩の国男声コーラスフェスティバル2022」が舞台です。ささやかでも聴衆が感動いただけるよう練習を重ねたいと思います。

イリス合唱祭関係者の皆さん、頑張った団員の皆さん、そして厳しくも優しく指導していただいた先生、有難うございました。